

高密度織物業 攻めの投資

より薄く、軽く 開発競争にしのぎ

市場拡大が続くアウトドア・スポーツ衣料品。「より薄く、より軽く」を追求し、アパレル各社は開発競争にしのぎを削る。生地を供給する北陸の繊維産地でも、こうしたニーズに応えられる高密度織物メーカーのトップ二社が、攻めの投資にかじを切り始めた。(瀬戸勝之)

高密度織物は、二十度の極細糸を使う。糸(一捻)長さ九千が(二捻)以下という髪不良品が発生しやすくている。その一社、丸井織物の毛の三〇七分の一程 高い織りの技術が要求

(石川県中能登町)は、グループ会社を含め約千台ある織機が一年以上、フル稼働の状態が続いている。「今冬シーズン向けの受注もいっぱいだ」と宮本徹社長は表情は明るい。けん引役は七十五の糸を使った高密度

織物。ダウンジャケットト用などに需要は右肩上がり、年末に織機百七十三台を一気に更新することを決めた。百台超の入れ替えは、ここ数年にない「大型補強」だ。

古い織機は一段太い糸を使う衣料用裏地や産業資材の増産に活用し工場拡張のため廃業した織物会社も買収。一連の投資額は約九億

円と例年の倍近い。暖冬で在庫が膨らむリスクもあるが、宮本社長は「日本や欧米、韓国での軽薄化のトレンドは当面変わらない。今後は中国など新興国でも需要は高まるはず」と強気の見方を示す。

カジグループ(金沢市)も約五億円を投じ、七捻までの糸を使う高密度織物を二割増産することを決めた。

来月中旬に石川県かほく市の織物工場を一棟増設、糸ののり付けや乾燥など織り工程の前に必要な準備機一台と織機五十台を新たに導入する。

軽薄化のトレンドはカジユアル衣料にも浸透しており「機能性とファッショ性の融合を求めて、アパレルからの相談は年々増えている」と梶政隆社

長。「川下」への提案力を高めるため、担当の「開発営業部」も順次増員している。攻めの姿勢の背景には、技術で迫り来る台湾メーカーの動きがある。「立ち止まっていたら二〜三年でキャッチアップされる。優位性を保っているうちに積極投資して引き離さない」と(梶社長)

北陸産地で軽薄化の波に乗っていきけるのは四、五社ともされる。「今後は『勝ち組』によるM&A(企業の合併・買収)が増えてくるのではないか」(業界関係者)との指摘も聞かれた。



丸井織物では高密度織物の増産で工場はフル稼働が続く＝石川県中能登町で カジグループは「川下」のアパレルへの提案力も強めている＝金沢市で(一部加工しています)